様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：３２４０４
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３３２０１１７

研究課題名（和文）ポートフォリオ的アプローチによる未来指向型英語指導モデルの構築

研究課題名（英文）English Teaching Models Based on the Portfolio-Oriented Approach

研究代表者
高田　智子（Takada, Tomoko）

明海大学・外国語学部・准教授

研究者番号：２０５１７５９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　7,900,000円

研究成果の概要（和文）：学習者の自律というCEFRの教育理念を精査し，この理念を具現化する海外の事例研究を行い、日本の学校文化に適応した英語指導モデルの原型を構築した。これは3段階で構成される。すなわち，学習到達目標によって学習を「見通し」、「見通しを実現する言語活動」を行い，パフォーマンス評価シート、ポートフォリオ検討会、プログレスカード等を用いて学習と言語の「振り返り」を行う。この原型を新潟・千葉・東京の国公私立の中・高等学校6校および新潟県内の1地域で実践し、各校の実態に応じた指導モデルを構築した。知識・技能面の伸長と共に、学習過程や課題に対する意識が高まり，自律への変容が見られた。

研究成果の概要（英文）：A theoretical study on learner autonomy, one of the educational philosophy of CEFR, along with analyses of class observations in primary and secondary schools in Finland, has led to the development of a prototype of English language teaching suitable for Japanese school contexts. The prototype consists of three components: (a) setting learning attainment targets, (b) language use activities to achieve the targets, and (c) reflection of learning process and products through the use of instruments including performance evaluation sheets, portfolio conferences, and progress cards. The prototype was implemented in six national, prefectural, and private secondary schools in Niigata, Chiba, and Tokyo, and one school area in Niigata Prefecture, with adjustment for the school context of each research site. The results showed that students improved in their knowledge and skills of English, raised awareness of learning process and tasks, and learned to take responsibility for their own learning.

研究分野：英語教育

キーワード：学習者の自律　agency　Can-Doリスト　ポートフォリオ　英語コミュニケーション能力

１．研究開始当初の背景

本研究代表者は，投野由紀夫を代表者とする平成 20 年度～23 年度科学研究費補助金基盤研究（A）（研究課題番号 20242011）の研究分担者として，CEFR に基づいた日本人学習者のための英語到達指標（CEFR-J）の作成とその妥当性検証に携わり，同時に CEFR の教育理念とそれに基づく教育実践に関する研究に参加した。この研究過程で，CEFR の教育理念が日本の外国語教育の理念に通じるものであり，日本の外国語指導方法論の改善に寄与するものと確信するに至った。なかでも経験学習理論を言語教育に応用したポートフォリオ的アプローチ（Kohonen, 2006, 2009）に注目し，これを CEFR の教育理念を実践する外国語教育の未来志向型モデルとして詳細に研究し，日本の中・高等学校における応用可能性を探ろうと考えた。

２．研究の目的

(1) CEFR の教育理念のひとつである学習者の自律（learner autonomy）の概念について理論構築をする。
(2) フィンランドの小・中・高等学校で実施されているポートフォリオ的アプローチの特徴を実地調査する。
(3) (1)(2)を踏まえ，日本の中・高等学校で実行可能な英語指導モデルの原型を構築する。
(4) 研究代表者・研究分担者の本拠地にある中・高等学校に研究協力を依頼し，(3)で構築した英語指導モデルの原型を 1～2 年間試行する。その効果を言語的・認知的側面から定量的に分析すると共に，社会的・情意的側面から定性的に分析し，ポートフォリオ的アプローチの応用可能性を検証する。

３．研究の方法

(1) Benson, Kohonen, Little 等の論文に学ぶと共に，海外研究協力者である Kohonen 名誉教授（タンペレ大学）のセミナー，学習者の自律をテーマとする IATEFL（International Association of Teachers of English as a Foreign Language）の分科会のワークショップに参加した。

(2) 3 つの方法を採用した。①フィンランドのヘルシンキ，タンペレ，ユバスキュラの小・中・高等学校を訪問し，ポートフォリオ的アプローチの授業実践を見学し，授業分析を行った。②観察した授業の授業者へのインタビューを通して，ポートフォリオ的アプローチの特徴を明らかにした。③フィンランドの英語の教科書を自律の観点から分析した。

(3) (1)(2)を踏まえ，自律した学習者像を明らかにし，日本の中・高等学校でポートフォリオ的アプローチを応用する条件を明らかにし，日本の学校文化に適応した英語指導モデルの原型を構築した。

(4) 新潟，千葉，東京の各地区において，以下の方法により英語指導モデルの原型を適用する実践研究を行った。

①新潟

(a) 公立実業高校，(b) 国立附属中学校，(c) 同一地域の小・中学校で実践研究を行った。(a) では，研究協力者の実践を研究者がメールで協議して英語指導モデルを構築した。(b) では，研究者が授業を参観し，研究協力者と協議して指導モデルを開発した。(c) では，授業研究と主任会を企画した指導主事が，研究者の助言を取り込んで指導モデルを提案した。各実践の成果をアンケートを用いて質的に検証した。

②千葉

文部科学省事業の拠点校として CAN-DO リストの活用に取り組む公立高校で，ライティングにおける実践研究を行った。能力記述文の曖昧性，抽象性を，高 1 の実態に即して具体的な指導方法，評価方法に変換し，生徒に内省の観点と方向性を与えたことが特徴である。学習到達目標および単元目標の確認➡初稿執筆➡教師によるフィードバックおよび生徒の振り返り活動➡第２稿執筆➡自己評価・教師評価というサイクルを 8 カ月間に 4 回行った。生徒作品を量的に分析し，言語面での変容を検証した。生徒の振り返りの記録は質的に分析し，自律意識の変容を検証した。

③　東京

(a) 公立中高一貫校，(b) 私立中高一貫校，(c) 公立高校で実践研究を行った。(a)(b)(c) すべてについて，研究者による授業参観および研究協力者との協議を重ね，各学校に適した英語指導モデルを構築した。各実践の成果については，第一に，生徒の自律意識を測るアンケートを用いて量的・質的に検証し，第二に，定期的に課したライティング課題における生徒のパフォーマンスの変化を量的・質的に検証した。

４．研究成果

(1) 「自分の学習を管理する能力」という autonomy の定義が，1990 年代になって次第に発展的にとらえられ，相互依存を含む社会的側面も含むようになった。その背景にあるヴィゴツキーの社会文化理論と autonomy を結ぶ概念として agency があり，これがポートフォリオ的アプローチの中心にあることを整理した。

(2) ①授業分析の結果，フィンランドの小学校から高校まで一貫して観察された主な特徴は次のとおりである。(a) 積極的な学びが奨励され，児童・生徒は学習集団の一員として責任を果たしている，(b) 教室はひとつのコミュニティとみなされ，生徒間で協力し合う協働学習の実践が日常的な方法として貫かれている，(c) ノートのまとめ方や辞書使用など，自ら学ぶための学習方略を教えてい

る，(d) 宿題を通して学習習慣が形成されている，(e) 目標言語使用の機会が充実している一方，言語使用を支える言語知識の明示的な指導が行われ，重視されている，(f) 目標言語の使用を奨励すると同時に，母語使用も積極的に認めている。

②授業者へのインタビューから明らかになったフィンランドのポートフォリオ的アプローチの主な特徴は，次のとおりである。(a) 作品集（Dossier）を作成するため，学習者のアウトプット活動の機会を増やすことができる，(b) 作品集を共有することにより，社会的スキルが育つ，(c) 学習者は自らの学習を内省し分析することを学ぶ，(d) 教師も児童・生徒も経年的に学習量を把握することができる，(e) 学習者の言語熟達度が限られていても適用でき，学習動機を高めることができる。

③教科書分析から明らかになったフィンランドの英語教科書の特徴は，次のとおりである。(a) 学習開始当初から，組織的な発音・語彙・文法指導を展開している，(b) ワークブックが充実している，(c) 学習方法の学習を促進している，(d) 学習への振り返りを組織的に配置している。

(3) (1)(2)の結果を踏まえ，本研究では自律した学習者像を次のように定義した。(a) 学習の目的と過程について当事者意識をもつ学習者，(b) 学習到達目標を達成するために主体的に英語が使える学習者，(c) 学習と言語について内省する学習者。

これに基づき，自律した学習者を育成するために，「見通し」「見通しを実現するための活動」「振り返り」を 3 本の柱とする英語指導モデルの原型を構築した。

(4) 英語指導モデルの原型を新潟・千葉・東京の 3 地区で実践した成果は以下のとおりである。

①新潟

(a) 実業高校ではパフォーマンス評価シート，核となるパフォーマンス課題，ポートフォリオ検討会などの手立ての情意面および知識・技能面での効果を認めた。自律的な学習者を育成する指導モデルとして，A ➡ B ➡ C ➡ B ➡ C ➡ D ➡ C（注：A 見通し活動　B 見通し実現学習活動　C 振り返り活動　D 評価）を確立した。(b) 附属中学校では，プログレスカードによる形成的評価が生徒の学ぶ喜びと反応的自律を育んだ。学習タスク ➡ 練習タスク ➡ 評価タスクの過程に，自己評価・相互評価・ミニ総括的評価を組み込む指導モデルを構築した。(c) 同一地域の小学校・中学校では，習得すべきスキルと言語活動の確認 ➡ 課題の設定 ➡ 評価基準の決定 ➡ 課題と評価の説明➡ 課題の練習 ➡ 評価の実施，という手順を共有した。小学校外国語活動では，振り返りカードの工夫などで自主的・自発的に取り組む児童が育成できることを確認した。

②千葉

学習到達目標の具体化という手続きを踏んで，パフォーマンス課題，振り返りシートなどの手立てについて，言語面での一定の効果を認めた。論理的につながりのある文章を書けるレベルに達するにはさらに指導と学習が必要であるが，パラグラフの構成という形式の理解は達成した。

学習者の自律について，(a)自己意識，(b)学習への意識，(c)言語への意識という 3 つの観点から生徒の内省記述を分析したところ，(a)について小規模な本実践では目覚ましい効果は見られなかったが，(b)および(c)について意識の深まりを確認した。(b)について，学習の必要性が実践期間を通して認識され，進歩の度合いについてはメタ言語レベル，あるいは心理的レベルで自覚されていることが明らかになった。(c)について，第 4 回のサイクルで観点を与えずに自己評価をさせたところ，メタ言語的内省を示す記述が見られた。

本指導モデルの今後の課題は，(a) 能力記述文の教師による解釈が，生徒の言語熟達度の発達状況に応じて変化することにどのように対応するか，(b)学習到達目標が達成されたと判断する観点に何を含めるべきか，という点である。

③東京

(a) 公立中高一貫校では，「ラウンド制カリキュラム」に自律の観点から改善を加え，言語材料のインプット ➡ インテイク ➡ アウトプットという従来の学習プロセスに，「見通しの明確化」「言語活動の充実」「振り返り」を加えた英語指導モデルを構築した。その成果として，生徒が授業中の活動を自律的に捉える姿が確認され，さらに，教室外における英語学習においても自主的・自発的に取り組む姿が確認された。(b) 私立中高一貫校においては，プログレスカードを用いて，見通しの明確化 ➡ 言語活動 ➡ 学習の振り返りという流れに沿った英語指導モデルを試行し，英語学習を始めたばかりの中学１年生であっても，自律意識を育成するための英語指導が可能であることがわかった。(c) 公立高校においては，(b)と同じ流れの英語指導モデルを試行した結果，生徒の自律意識に大きな変化が見られ，英語学習を前向きに，自主的に捉える姿が確認された。また，英語力に関しても，より長い文章を書くことができるようになった。

＜引用文献＞

① Kohonen, V. (2006). Student autonomy and the European language portfolio: Evaluating the Finnish pilot project (1998-2001). In L. B. Wolff & J. L. V. Batista (Eds.), *The Canarian conference on developing autonomy in the classroom: Each piece of the puzzle enriches us all.* La Laguna,

Gobierno de Canarias, Conserejia de Education, Cultura y Deportes, 2006, CD-Rom, Lecture 2.
② Kohonen, V. (2009). Autonomy, authenticity and agency in language education: The European Language Portfolio as a pedagogical resource. In R. Kantelinen, & P. Pollari (Eds.), *Language education and lifelong learning* (pp. 9-44). University of Eastern Finland, Philosophical Faculty.

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　6　件）

1 高田智子（2012）「CEFR が目指す autonomy と agency に関する考察」『明海大学外国語学部論集第 24 号』，査読無，75-86.

2 高田智子（2014）「ポートフォリオの歴史的背景と意義を整理する」『明海大学外国語学部論集第 26 号』，査読有，51-60.

3 伊東治己（2014）「フィンランドと日本の高校生の英語学習意識の比較研究」『四国英語教育学会紀要第 34 号』，査読有，1-16.

4 高田智子（2015）「指導と評価の改善のための CAN-DO リスト」『明海大学外国語学部論集第 27 号』，査読有，15-25.

5 今井理恵・松沢伸二（2015）「自律を育てる英語指導モデル：意欲を引き出すパフォーマンス課題を用いて」*ARELE, 26,* 査読有，413-428.

6 臼倉美里（2015）「『ラウンド制』授業の効果検証―自律意識の変化に焦点を当てて―」『英學論考（東京学芸大学紀要）』，査読有，39-57.

〔学会発表〕（計 18 件）

1 Aikawa, M., Midorikawa, H., & Takada, T. A qualitative study of a portfolio-oriented approach in a Japanese educational setting. ETA-ROC (English Teachers' Association of the Republic of China) The Twentieth International Symposium. 2011年11月1日，台北（台湾）

2 高田智子「Can-Do の背後にある概念」外国語メディア学会（LET）関東支部第 128 回研究大会，2012 年 6 月 9 日，関東学院大学（神奈川・横浜）

3 高田智子・伊東治己・松沢伸二・緑川日出子「ポートフォリオ的アプローチの理念と実際」全国英語教育学会第 38 回愛知研究大会，2012 年 8 月 4 日，愛知学院大学（愛知・名古屋）

4 松沢伸二・緑川日出子・高田智子「自らの学習に責任を持たせる小学校英語教育の理念と実際」全国英語教育学会第 38 回愛知研究大会，2012 年 8 月 5 日，愛知学院大学（愛知・名古屋）

5 伊東治己・高田智子・松沢伸二・緑川日出子・「Autonomy 育成の観点からのフィンランドの英語教科書の分析」日本教科教育学会第 38 回全国大会，2012 年 11 月 3 日，東京学芸大学（東京・小金井）

6 松沢伸二・高田智子・緑川日出子「フィンランドの英語授業の特徴―20 の授業観察記録の分析より―」全国英語教育学会第 39 回北海道研究大会，2013 年 8 月 10 日，北海学園大学（北海道・札幌）

7 高田智子・伊東治己・松沢伸二・緑川日出子「ポートフォリオの歴史的背景と意義を整理する」全国英語教育学会第 39 回北海道研究大会，2013 年 8 月 11 日，北海学園大学（北海道・札幌）

8 高田智子・戸村玲子・羽計仁子・木村一男「高校における CAN-DO チェックリスト作成・改訂・活用の取組み」関東甲信越英語教育学会第 37 回長野研究大会，2013 年 8 月 17 日，松本歯科大学（長野・松本）

9 松沢伸二「自律的な学習者を育てる手だてとしてのプログレス・カードの活用について」関東甲信越英語教育学会第 37 回長野研究大会，2013 年 8 月 17 日，松本歯科大学（長野・松本）

10 臼倉美里「自律した学習者育成の過程で育まれる教師の自律性 ―試行錯誤のプロセスとその成果―」関東甲信越英語教育学会第 37 回長野研究大会，2013 年 8 月 17 日，松本歯科大学（長野・松本）

11 Takada, T. Contextualization of the CEFR in English language teaching in Japan. The Inaugural Symposium and Workshop for the KAKEN Project. 2014 年 5 月 31 日，中京大学（愛知・名古屋）

12 高田智子「自律的学習者を育成する『CAN-DO リスト』の作成と活用に向けた取組み」全国英語教育学会第 40 回徳島研究大会，2014 年 8 月 9 日，徳島大学（徳島・徳島）

13 松沢伸二・今井理恵「自律を育てる英語

指導モデル：意欲を引き出すパフォーマンス課題とポートフォリオを用いて」全国英語教育学会第 40 回徳島研究大会，2014 年 8 月 9 日，徳島大学（徳島・徳島）

14 臼倉美里・緑川日出子「『ラウンド制』授業で生徒の自律意識はどのように育ったか」全国英語教育学会第 40 回徳島研究大会，2014 年 8 月 9 日，徳島大学（徳島・徳島）

15 高田智子・戸村玲子・羽計仁子・木村一男「学習到達目標達成に至る道：CAN-DO リストの意義を考える」関東甲信越英語教育学会第 38 回千葉研究大会，2014 年 8 月 23 日，明海大学（千葉・浦安）

16 松沢伸二・上村慎吾「自律を育てる英語指導モデル：見通し振り返り用プログレスカードとポートフォリオを用いて」関東甲信越英語教育学会第 38 回千葉研究大会，2014 年 8 月 23 日，明海大学（千葉・浦安）

17 伊東治己「フィンランドの英語教育から学べること」関東甲信越英語教育学会第 38 回千葉研究大会，2014 年 8 月 23 日，明海大学（千葉・浦安）

18 臼倉美里・緑川日出子・枝廣真弓・富水美佳「ポートフォリオ的アプローチに基づいた授業実践―学習者の自律を目指したプログレスカードとポートフォリオの活用―」関東甲信越英語教育学会第 38 回千葉研究大会，2014 年 8 月 23 日，明海大学（千葉・浦安）

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

○取得状況（計　0　件）

〔その他〕
① 研究成果報告書
1 『ポートフォリオ的アプローチによる未来指向型英語指導モデルの構築　中間報告書』（平成 25 年 3 月発行）

2 『ポートフォリオ的アプローチによる未来指向型英語指導モデルの構築　研究成果報告書』（平成 27 年 3 月発行）

② アウトリーチ活動
1 高田智子「CAN-DO リスト：What & How」平成 24 年度千葉県「英語力を強化する指導改善の取組」に係る拠点校における英語指導研修会（第１回），2012 年 6 月 13 日，千葉県立成田国際高等学校（千葉・成田）

2 高田智子「『CAN-DO リスト』の形での 学習到達目標の設定と活用 ―指導と評価の改善のために―」平成 25 年度千葉県「英語によるコミュニケーション能力・論理的思考力を強化する指導改善の取組」に係る拠点校における英語指導研修会（第１回），2013 年 6 月 11 日，千葉県立成田国際高等学校（千葉・成田）

3 高田智子「CAN-DO リストの理解と活用」千葉県教育研究会 安房支会英語教育部会安房支会一斉研修会，2014 年 4 月 24 日，館山市立第三中学校（千葉・舘山）

4 高田智子「指導と評価の改善のための『CAN-DO リスト』」平成 26 年度千葉県中・高等学校英語科 CAN-DO リスト研究協議会（第 1 回），2014 年 5 月 8 日，同 6 月 6 日，千葉県総合教育センター（千葉・千葉）

5 高田智子「『CAN-DO リスト』の理解と活用：『知っている』から『できる』へ」平成 26 年度浦安市中学校外国語（英語）科教員研修会，2014 年 8 月 19 日，浦安文化会館（千葉・浦安）

6 伊東治己「フィンランドの学校英語教育：子成功の背景を探る」平成 26 年度徳島県教育委員会　大学・研究機関等研修，2014 年 8 月 25 日，鳴門教育大学（徳島・徳島）

7 高田智子「CEFR 準拠の外国語教育に向けて」明治学院大学教養教育センター外国語教育研修会，2014 年 9 月 26 日，明治学院大学（神奈川・横浜）

8 高田智子「『CAN-DO リスト』見直しの視点」平成 26 年度千葉県中・高等学校英語科 CAN-DO リスト研究協議会（第 2 回），2014 年 11 月 4 日，千葉県総合教育センター（千葉・千葉）

9 高田智子「CAN-DO リストの作成と活用：これからの小中英語教育で目指すべきこと」平成 26 年度我孫子市第２回英語・英語活動主任研修会，2015 年 1 月 22 日，我孫子市教育委員会大会議室（千葉・安孫子）

10 高田智子「『CAN-DO リスト作成にあたっての振り返り』を生かすために」平成 26 年度千葉県中・高等学校英語科 CAN-DO リスト研究協議会（第 3 回），2015 年 1 月 30 日，千葉県総合教育センター（千葉・千葉）

11 臼倉美里「CAN-DO リストとは何か？」平成 26 年度藤枝市教育委員会英語部研修会，2015 年 2 月 13 日，藤枝市立青島中学校（静岡・藤枝）

12 臼倉美里「CAN-DO リストとは何か？」平成 26 年度鎌倉市英語研究会，2015 年 2 月 19 日，鎌倉市立腰越中学校（神奈川・鎌倉）

６．研究組織

⑴研究代表者

高田智子（TAKADA, Tomoko）
明海大学・外国語学部英米語学科・准教授
研究者番号：20517594/32404/206/27

⑵研究分担者

伊東治己（ITO, Harumi）
鳴門教育大学・大学院・学校教育研究科
教授
研究者番号：16102899/20901/763/55

松沢伸二（MATSUZAWA, Shinji）
新潟大学・教育学部・教授
研究者番号： 90207043/13101/778/20

緑川日出子（MIDORIKAWA, Hideko）
昭和女子大学・人間文化学部・非常勤講師
研究者番号：10245889/32623/218/25
（平成 26 年度は研究協力者）

臼倉美里（USUKURA, Misato）
東京学芸大学・教育学部・講師
研究者番号：00567084/12604/101/22
（平成 25 年度～平成 26 年度）

尾関直子（OZEKI, Naoko）
明治大学・国際日本学部・教授
研究者番号：00259318/35682/903/20
（平成 23 年度のみ）

⑶ 研究協力者

和田稔（WADA, Minoru）
明海大学・名誉教授
（平成 24 年度～26 年度）

⑷ 海外研究協力者

Viljo Kohonen
タンペレ大学・名誉教授